

麦縞萎縮病の防除に関する研究

上原等・葛西辰雄・野田弘之

1. 病土を入れた pot を半数は地上に露出し、半数は地下へ埋没して三保珍子を播種し、地温の変化と発病の関係をしらべた結果、pot を地下に埋めたものは、地上に露出したものに比して地温の最高温度はやゝ低く、最低温度はやゝ高く、このため日較差が少なく、発病は多かった。
2. 腐植含量の多い無病土と少ない無病土に、病土を同量あて混合して発病を調査したところ腐植含量の多い土壌の発病がきわめて多かった。
3. 病土に無病土を混合して数段階の稀釈病土をつくって発病を調査したところ、病土を 100 倍に稀釈しても発病を認めた。またそれぞれの稀釈病土に堆肥を施用すると、さらに発病を増加した。
4. 移植栽培(12 月上旬)は発病を防ぎ、遅播きによる生育遅延をカバーでき常に少発多収が期待できるが、その移植労力に難点がある。遅播きは 11 月 25 日播種では防除効果が不充分であり、12 月上旬まで繰り下げれば確実に発病を防ぎ得る。ただし、そのほ地の発病如何によっては、必ずしも増収するとは限らない場合も生ずる。遅播に石灰窒素を併用すれば 11 月 25 日播種でも効果が高く予め播溝へ石灰窒素を施用して分解させておいてから播種すれば、間土を置く労力が省けて能率的である。移植栽培には石灰窒素を併用するまでの必要はない。
5. 3 ケ年にわたって計 15 品種の耐病性をしらべた結果耐病性の順位は、四国稈 16 号>ユウナギハダカ、四国稈 17 号、クロシオハダカ、中国稈 4 号>シラヒメハダカ、ハシリハダカ、香川稈 1 号>セトハダカ、ハヤウレハダカ、四国稈 21 号、四国稈 23 号、三保珍子、西海 6 号、佐賀稈 1 号の順であった。四国稈 16 号はほとんど免疫性に近い強い抵抗性を示し、発病は常に僅少で収量も多い。たゞ品質に難があるといわれる。ユウナギハダカ、四国稈 17 号、クロシオハダカは、発病株率はかなり高いが被害程度は軽微で、病勢の回復が著しく実害は少ない。とくにユウナギハダカは品質収量ともに申し分なく、各県で奨励品種にとりあげられている優良品種であり実用性の最もすぐれた品種といえる。